

「豊臣期大坂図屏風」に描かれた大坂城とその構図

北川 央（大阪城天守閣研究副主幹 / なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）

大阪城天守閣の北川でございます。

私のほうは、最初、昨年秋に、今日も会場にお見えの関西大学の藪田貫先生のほうから、ヨーロッパのオーストリアで大坂城と大坂の市街を描いた屏風が出てきたので一度内容を検討してくれないか、ついては、ドイツのケルン大学のエームケ先生が写真をお持ちになるのでそれを見てくれと、そういうご連絡を受けまして拝見することになったわけです。実は、当初は全く期待しておりませんでした。といいますのも、これまでもこの手の話、海外に大坂を描いた屏風があるという話は何度か持ち込まれてきたんですが、いい作品にめぐり合ったことがなかったんですね。それで、今回もまたこれまでと同じだろうと、その程度の気持ちでエームケ先生をお迎えしたんです。



北川 央氏

大きな1扇ごとの写真をお見せいただいて、ほんとうに驚きました。そこに描かれていたのは紛れもない豊臣大坂城だったからです。私は以前、豊臣大坂城の極楽橋に注目して論文をまとめたことがあるんですが、その極楽橋がこれまでのいずれの作品よりも詳細に描かれていました。それですごく驚き、内容をさらに詳しく検討してみたいというふうに思ったわけです。

今、高橋先生からもお話がありましたように、大阪城天守閣では2年前に「大坂図屏風—景観と風俗をさぐる」という展覧会を開催しまして、現在知り得る限りの「大坂図屏風」を一堂に集めました。その時点では、今回のこの「豊臣期大坂図屏風」と名づけられた屏風の存在を知らなかったわけですが、その展覧会で展示した作品と今回の屏風とを比較いたしまして、大体どのあたりに位置づけられる屏風なのかということこれから簡単に紹介させていただき、後のパネルディスカッションの話題提供としたいと思います。

それでは最初に、「大坂城図屏風」と名づけられている屏風から見て行きたいと思います（図1）。現在は大阪城天守閣の所蔵になっておりますが、長らく東京の川上さんというお宅にございまして、「川上屏風」と呼ばれてきた屏風です。制作年代は、美術史でいうところのいわゆる桃山時代にさかのぼる稀有な屏風でございますが、残念ながら2扇分しか残っていません。全体が果たしてどんな画面構成だったのかはわからないわけですね。2扇分の断片の屏風だということです。

次に大阪歴史博物館でお持ちの「京・大坂図屏風」という6曲1双の屏風です（図2）。そのうちの右隻に豊臣大坂城が描かれています。ところが、この作品は、残念ながら江戸時代の半ばぐらいになって作られた、成立の遅い作品なんですね。ただし、その頃に何の根拠もなしに豊臣大坂城を描くのは無理だったでしょうから、おそらく何か原本が存在したのではないかと考えております。内堀が外堀につながるなど、画面構成上の問題点も少し抱えています。

この「京・大坂図屏風」のもう片方、左隻には中央に秀吉が建設した方広寺の大仏殿が大きく描かれています（図3）。その右手に描かれている神社は豊臣秀吉が遺言で自らを神様として祀った豊国神社です。

次は「大坂冬の陣図屏風」。慶長19年（1614）大坂冬の陣の合

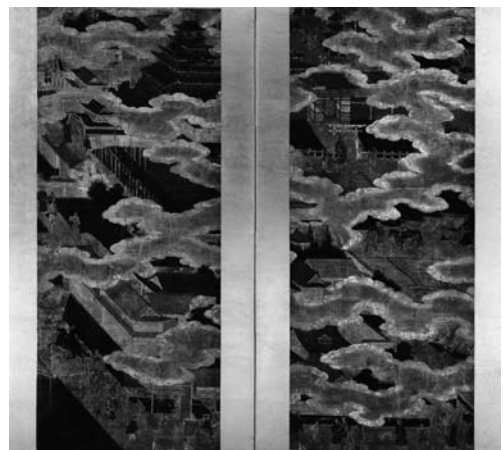


図1：大坂城図屏風（大阪城天守閣蔵）

図2：京・大坂図屏風（大阪歴史博物館蔵）
右隻

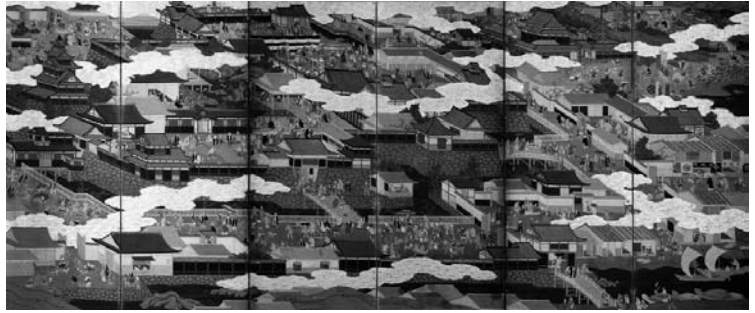


図3：京・大坂図屏風（大阪歴史博物館蔵）
左隻

戦の様子を描いた屏風で、この作品自体は下絵（粉本）もしくは模写本で、残念ながら完成した作品の行方はわかりません。東京国立博物館の所蔵品です。右隻第5扇から左隻第4扇にかけて大きく大坂城が描かれていますが、天守とか本丸御殿など、中心部分は左隻に描かれています（図4、5）。

続いて「大坂夏の陣図屏風」です。先ほどの冬の陣の翌年、慶長20年に起こった大坂夏の陣を描いた屏風絵で、右隻の左端から左隻の右端にかけて豊臣大坂城が描かれています（図6、7）。

「大坂夏の陣図屏風」は戦国合戦図屏風の中の最高傑作と言われるんですが、そのゆえんは左隻を持つことです。この左隻は、右の一番端に大坂城の極楽橋が描かれていますが、大半は大坂夏の陣で大坂城が落城した後、一般庶民が合戦に巻き込まれてたいへんな目に遭っている状況が描かれています。他の合戦図屏風が武将たちの勇壮な合戦シーンに終始するのに対して、この屏風は落城後の状況、庶民の様子まで描き込んだということで非常に特筆されるべき存在になっています。

実はこれまで、豊臣大坂城を描いた屏風は、以上の4点しか知られていませんでした。したがって、今回の屏風は5点目の作品になるわけです。そのうち「大坂冬の陣図屏風」と「大坂夏の陣図屏風」は合戦図屏風ですから、平時の豊臣大坂城と城下を描いた屏風は、川上屏風と呼ばれる「大坂城図屏風」と、大阪歴史博物館がお持ちの「京・大坂図屏風」の2点しかありませんでした。でも、「大坂城図屏風」は、2扇分の断片しか残っていませんし、大阪歴史博物館の「京・大坂図屏風」は成立が江戸中期までおとります。となりますと、今回の屏風は豊臣大坂城とその城下町を描いたものとして、たいへん重要な位置を占めることがわかります。私自身は、今回の屏風について、制作年代は1600年代の中ごろか、後半ぐらいではないかと考えており、豊臣時代にまで遡る作品だとは思っていませんが、だからといって価値が落ちるわけではありません。豊臣大坂城とその城下を描いた屏風として



図5：大坂冬の陣図屏風（東京国立博物館蔵）左隻



図4：大坂冬の陣図屏風（東京国立博物館蔵）右隻

図6：大坂夏の陣図屏風（大阪城天守閣蔵）
右隻



図7：大坂夏の陣図屏風（大阪城天守閣蔵）
左隻

は本当に稀有なもの、たいへん貴重な作品が出てきたというふうに思っています。

次は「大坂市街図屏風」と名づけられている作品で、京都の林さんという方がお持ちです（図8）。これも右から5扇分はつながっているんですが、左の1扇分は連続していません。おそらく本来は6曲1双であったものが、今はそれぞれ5扇分と1扇分しか残ってなくて、それを無理やり6曲1双に仕立てたんだらうと考えられています。ここに描かれた大坂城は徳川幕府が再築した大坂城です。

さて、次の作品は近年海外に出たのを大阪城天守閣で買い戻したもので、「大坂市街・淀川堤図屏風」という名称をつけています。8曲1双の屏風です（図9、10）。この屏風の右隻6扇から8扇にかけて徳川大坂城が描かれていまして、東横堀がぐるっと半円状になっています。実際には南北にほぼ直線の堀ですが、湾曲して描かれています。今回の屏風と同じように右隻の右端には住吉、堺まで描き込んでいます。左隻のほうは非常に味気ないんですけども、淀川とその両堤をひたすら描いています。最後は石清水八幡宮まで描いています。こういう構成をとる屏風です。

では、今度の屏風に描かれた大坂城について、後々パネルディスカッションをしていく上でも必要かと思いますので、私が検討したところを少し紹介させていただきます。まず、豊臣大坂城を描いた4つの屏風に描かれる天守の比較です。

最初に「大坂城図屏風」（「川上屏風」）の天守ですが、5層の天守が描かれています（図11）。外から見たら屋根が5重になっています。それから望楼式の天守として描かれています。望楼式というのは最上層に物見櫓、すなわち望楼を載せた形式で、今の大阪城の天守閣もそうなんですが、最上階に行くと回廊がめぐらされていて、建物の外側に出て眺望ができるようになっています。こういう形式の天守が望楼式で、これに対して江戸時代の徳川大坂城の天守は層塔式といまして、一番下から順々に建物を積み上げたタワー形式の天守です。こちらの形式では最上階に行っても建物外には出られません。窓から外をながめるだけということになります。現在ある天守閣でいいますと、名古屋城の天守閣が徳川大坂城の天守に最も近い姿をしています。



図8：大坂市街図屏風（京都・林家蔵）

さて次に、大阪歴史博物館所蔵の「京・大坂



図 9：大坂市街・淀川堤図屏風（大阪城天守閣蔵）右隻



図 10：大坂市街・淀川堤図屏風（大阪城天守閣蔵）左隻

図屏風」に描かれた天守です。ここにも 5 層の望楼式の天守が描かれています（図 12）。

続いて「大坂冬の陣図屏風」に描かれた大坂城の天守。これもやはり 5 層の望楼式の天守が描かれています（図 13）。

「大坂夏の陣図屏風」にも同様に 5 層の望楼式の天守が描かれています（図 14）。

そして、今回の屏風絵です。ここにも 5 層の望楼式天守が描かれています（図 15）。

屏風絵に描かれた内容をどこまで有効な情報として判断するかという問題があるんですね。例えばこれら 5 つの屏風で天守の装飾が全然違います。では、それらは全く別の建物を描いたと考えるのか、ということですね。例えば今回の屏風の例でいいますと、住吉大社に社殿が 4 つ描かれていますけれども、それらが横並びに 2 列で 4 棟並んでいます。今の社殿構成と違いますから、当時は住吉大社の社殿はそのように並んでいたんじゃないか、屏風絵の内容から、そういうふうと考えていいのか、ということなんですね。屏風絵というのは必ずしも実景を描いているわけではありませんので、どこまでを屏風の景観を読み解くための有効な情報か、ということを考えなければなりません。私自身は、天守に関していいますと、とりあえずは 5 層の望楼式天守であるということだけを、有効な情報としておけばよいのではないかと考えています。



図 11：大坂城図屏風（大阪城天守閣蔵）に描かれた大坂城の天守



図 12：京・大坂図屏風（大阪歴史博物館蔵）に描かれた大坂城の天守



図 13：大坂冬の陣図屏風（東京国立博物館蔵）に描かれた大坂城の天守



図 14：大坂夏の陣図屏風（大阪城天守閣蔵）に描かれた大坂城の天守

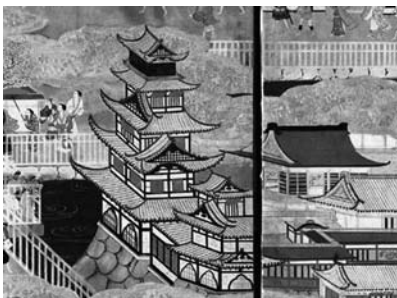


図 15：新出の「豊臣期大坂図屏風」に描かれた大坂城の天守



図 16：大坂城図屏風（大阪城天守閣蔵）に描かれた大坂城の極楽橋

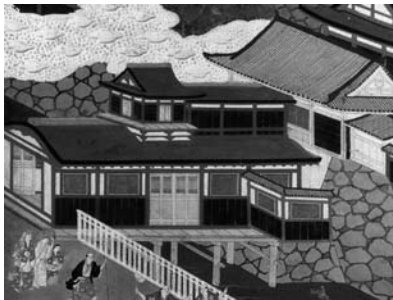


図 17：京・大坂図屏風（大阪歴史博物館蔵）に描かれた大坂城の極楽橋

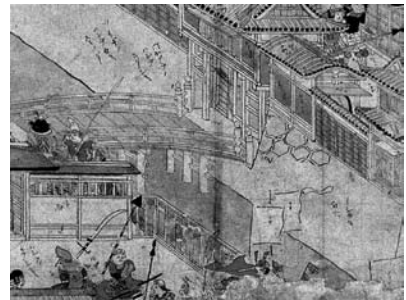


図 18：大坂冬の陣図屏風（東京国立博物館蔵）に描かれた大坂城の極楽橋



図 19：大坂夏の陣図屏風（大阪城天守閣蔵）に描かれた大坂城の極楽橋



図 20：新出の「豊臣期大坂図屏風」に描かれた大坂城の極楽橋

さて次に極楽橋です。川上家旧蔵の「大坂城図屏風」に描かれた極楽橋には、橋の両側に板塀がついていて、連子窓が設けられています。こういう形式の橋を廊下橋と呼びますが、上には楼閣が載っております（図 16）。

「京・大坂図屏風」に描かれた極楽橋、これにもやはり塀がついておりまして上に楼閣が載っています（図 17）。先ほどの「大坂城図屏風」と比較しますと楼閣の屋根の向きが違っていています。これが有効な情報かという、私はそうとは考えません。上に楼閣が載る廊下橋の様式であるということが重要なんであって、楼閣の屋根がどういう向きに描かれているかという、そこまでのディテールは有効な情報ではないと考えるべきだと思います。

次に「大坂冬の陣図屏風」の極楽橋。この極楽橋は楼閣がなく、ごく普通の擬宝珠・勾欄だけの橋として描かれています（図 18）。

「大坂夏の陣図屏風」にも黒塗りで、擬宝珠・勾欄の橋が描かれています（図 19）。冬の陣、夏の陣当時には、極楽橋は擬宝珠・勾欄の橋であったということです。

では、今回の屏風絵の極楽橋はどうかというと、やはり両側に板塀が付きまして、上に楼閣が載っています（図 20）。先ほど、今回の屏風絵が、私がこれまで見てきた中で、極楽橋を一番詳細に描いていると言いましたのは、両側の板塀や上層の楼閣の外壁に彫刻等が見られるからなんです。これは、ルイス・フロイスの報告の記述内容とも合致し、私は有効な情報だと考えています。実は、この廊下橋という様式の豪華な極楽橋は慶長元年（1596）に架けられるんですが、慶長5年には解体されて、京都・豊国神社に移築されてしまうんですね。そのことは、醍醐寺の義演というお坊さんの『義演准后日記』に記されています。ですから、廊下橋形式の極楽橋がなくなって、大坂冬の陣図屏風・夏の陣図屏風では擬宝珠・勾欄の橋になってしまうわけです。

最後になりましたが、もう一つ申し上げておきたいのは、先ほどから豊臣大坂城を描いた屏風絵をご覧いただきましたが、それらと今回の屏風を比べてみますと、描くアングル、構図が全然違うということにお気づきでしょうか。この屏風以外はすべて西側から大坂城を眺めています。この屏風だけが北側から眺めているんですね。これも、この屏風を考えていく上で大変重要なポイントだと考えています。

一応私のプレゼンテーションはこれで終わらせていただきます。

※図版 1～14、16～19 は『特別展 大坂図屏風—景観と風俗をさぐる』（大阪城天守閣、2005 年）より転載した。